

(入来花水木会示現流講演会参考資料)

「薩摩士風を形成した示現流」“流祖・東郷^{ちゅうい}重位^{じげんりゅう}を知ろう”



示現流流祖東郷重位

本日は薩摩の地に 420 年以上にわたって伝承されてまいりました古
武道「示現流兵法」(剣術) ^{じげんりゅうひょうほう} をご覧いただきながら薩摩武士の精神的支
柱となった示現流について渋谷一族の末裔でもあります流祖東郷^{ちゅうい}重位
のことなどお話をさせていただきたいと思います。

演武は、公益財団法人示現流東郷財団・示現流第 13 代宗家東郷^{しげたか}重賢
ほか示現流門友会有段者にてつとめさせていただきます。

■流儀解説内容

示現流^{じげんりゅう}は戦国時代末期に創流された東郷藤兵衛肥前守重位^{とうごうとうべ えひぜんのかみちゅうい}を流祖とする薩摩独特の剣術で、鹿児島城^{つるまる}（鶴丸城）が完成した今から420年前の1604年に、初代薩摩藩主（島津家18代当主）島津家久公^{いえひさ}により正式に薩摩藩の剣術として誕生しました。

流儀名は種子島に伝わった鉄砲の記録「鉄砲記」^{てつぽうき}などでも知られる当時きっての外交官であった薩摩藩学僧・南浦文之和尚^{なんぽぶんし}により示現流^{じげんりゅう}と命名されました。

流祖^{ちゅうい}の重位は、はじめ藩内で行われていたタイ捨流^{しゃ}という剣術を学んでおり二十数歳でその極意に達していました。

そして、天正15年（1587）島津家16代当主・島津義久公^{よしひさ}に従って上洛した際、天真正自顕流^{てんしんしょうけんりゅう}の奥義^{おうぎ}を極めた曹洞宗天寧寺^{そうどうしゅうてんねいじ}の善吉和尚^{ぜんきちおしょう}とめぐりあい、京都滞在中のわずか半年余りの修行で天真正自顕流^{てんしんしょうけんりゅう}の相伝^{そうでん}を受けました。



萬正山天寧寺（京都市）

薩摩に帰った重位^{ちゅうい}は、屋敷内全部の木を打ち枯らすほど心技^{しんぎ}を練ること三年、タイ捨流^{しゃ}と天真正自顕流^{てんしんしょうけんりゅう}の精髓^{せいすい}を総合^{そうごう}渾和^{こんわ}して後に「示現流兵法」^{ひょうほう}となる独自の剣術を編み出しました。そして、重位44歳の時、初代薩摩藩主（島津家18代当主）家久公^{いえひさ}より、薩摩藩の剣術師範役^{けんじゅつしはんやく}を命ぜられ、当時外交窓口拠点であった坊津^{ぼうのつ}の地頭職をつとめながら藩士の教育に活躍するところとなります。



示現流稽古道具

示現流は「一太刀の打ち」と言われ、“え〜い”という独特のかけ声とともに初太刀にすべてを賭ける門外不出とされてきた薩摩独特の剣術です。

一太刀の激しい攻撃が そのまま防禦を兼ね、機先を制するというもので、その教えは

- 一、一の太刀を疑わず二の太刀は負け
- 一、刀は自己の防具に非ず
- 一、人に隠れて稽古に励む

そして、最も大事にされてきたのが

- 一、刀は抜くべからざるものなり

という物事を平和裏に解決する度量を持った人格育成でした。

以上の四つの教えにあるように、何事を行うにも生死一如の真剣な境地を養うべく、古来生死の境の中で真剣に行じてきた人達の「業の集積」「心の集積」として伝授されてきました。

また、歴代の藩主も示現流の奨励に努められた結果、薩摩士風の振興に貢献するところとなりました。

さらに 27 代斉興公は、「御流儀示現流」と称するよう命ぜられ、厳格に門外不出とされ、時世に迎合せず当初そのままの姿で東郷家男児により一子相伝され、歴代の古文書（鹿児島県指定有形文化財東郷家古文書）と共に、現在第 13 代宗家東郷重賢に伝承されています。

平成 7 年に示現流の正確な伝承、振興を期するため「財団法人示現流東郷財団」が第 11 代宗家重政の遺志を奉じて設立され、平成 9 年 5 月拝領屋敷跡に示現流兵法所並びに史料館が完成、これまで門外不出

(入来花水木会示現流講演会参考資料)

とされ非公開となっていた歴代古文書等が一般にも公開されるようになりました。平成25年には公益財団法人となり第13代宗家重賢が理事長に就任、示現流の保存、普及に情熱を傾けています。



拝領屋敷跡に建つ示現流兵法所史料館（鹿児島市東千石町）



示現流第13代宗家東郷重賢

本日は示現流の基本稽古である「立木打」、続いて型稽古の中から初度と呼ばれる第一ステップより示現流の奥義十二の打ちを織り込んだ最初に習い終生これを極めていくという「燕飛」という型、脇差など短

(入来花水木会示現流講演会参考資料)

い武器での型「小太刀」、多人数を相手に戦うことを想定した「再起」、
「三太刀」、引き続き両度と呼ばれる第2ステップより相手の攻撃を一
太刀で仕留めるという「持掛」、「早捨」という型、槍や薙刀など長尺
の武器を持つ相手を想定した「長木刀」、そして最後に段の技より初段・
二段の型をご覧いただきたいと思います。



島津家初代忠久公誕生記念祭での示現流演武奉納（大阪住吉大社）



示現流演武「持掛」の型

■鹿兒島城御楼門と一緒に誕生した薩摩の秘剣示現流



復元された鹿兒島城御楼門

2020年3月末、鹿兒島城（通称＝^{つるまる}鶴丸城）^{ごろうもん}御楼門が147年ぶりに復元されました。^{ごろうもん}御楼門は初代薩摩藩主となった島津家18代当主島津家久公により慶長6年（1601）に建設が始まった鹿兒島城のシンボルとして慶長9年（1604）に完成しました。

戦国の世が終わり、徳川將軍家を頂点とする新しい武士の時代がスタートしたこの時、これからの侍の時代にふさわしい薩摩武士を育てようということで薩摩藩では東郷^{ちゅうい}重位が新しく藩の剣術師範役として拔擢され、重位の修めていた剣術の流儀名が^{じげんりゅう}示現流と命名されました。

^{ちゅうい}重位はそれまで島津家の剣術師範役をつとめていたタイ捨流の師範^{ひがししんのじょう}東新之丞を^{ちゅうい}重位独自の剣法でもって退け、藩主家久公^{いえひさ}の信任を得たのです。示現流の命名者は「^{ぶんしてん}文之点」と呼ばれる漢文の訓読法を完成させた薩摩藩お抱えの江戸時代きっての学僧で、外交官として薩摩藩ひい

ては將軍家の外交に大きな役割を果たした南浦文之玄昌和尚なんぽぶんしげんしょうです。

(*鹿児島城下大龍寺だいりゅうじの開山となった文之和尚ぶんしは、薩摩藩お抱えの黒衣の外交官として活躍、鎌倉建長寺けんちやうじの住職も兼任しました。種子島に伝わった鉄砲伝来の記録「鉄砲記」てっぽうきの作者としても知られます。)

「示現」の持つ意味

重位ちゅういとともに家久公に仕え、十年余にわたり重位ちゅういからその若き日の修行の過程をつぶさに聞くことが出来た文之和尚ぶんしは、これからの侍の時代にふさわしい薩摩藩の剣術流儀とするため仏教の經典『觀世音菩薩普門品』かんぜおんぼさつふもんぽんのなかの示現神通力じげんじんつうりきからヒントを得て「示現」じげんの一句を選んで「示現流」じげんりゅうと命名しました。意味するところは、師の啓示を受け、自ら励み、修行を重ねることによって神力じんりきに通じるということです。文武兩道ぶんぶりやうどうを目指したその教えは、以後、薩摩武士の精神的支柱となり今日まで伝承されてきました。

“一撃必殺”という単なる戦技習得せんぎしゅうとくでなく修行を通じ、より高度な人間形成を目指し学ぶことを求めた重位ちゅういの教えは、修行することが自らを完成する道であり、そのことを自覚して怠らず努力を重ねる者はその資質を完成することができるということです。「示現」じげんの二字の持つ意味は重いのです。

以後、示現流じげんりゅうは江戸時代を通じて門外不出の薩摩藩の兵法として代々の薩摩藩主に重用され、400 年以上を経た今日まで創流当初その

(入来花水木会示現流講演会参考資料)

まの姿で、現在第13代宗家東郷重賢^{しげたか}とその門人たちによって日本の誇る貴重な武の文化遺産として伝承されています。

示現流^{しげんりゅう}はその教えにある通り「刀は抜くべからざるものなり」と無益な殺生を厳しく戒めるとともに、危急の際には“無念無想に打つ”という極意と、いったん刀を抜いたら最初の一太刀^{ひとたち}に全てをかける“一の太刀^{いち}を疑わず、二の太刀^{にたち}は負け”という厳しさを伝えています。

薩摩武士の品格を形作っていった示現流^{しげんりゅう}は、今を遡る420年前に鹿児島城御楼門と一緒に誕生したことを知っていただきたいと思います。



東郷重位公墓（鹿児島市草牟田墓地）

示現流の稽古法とその特色

示現流の稽古は、防具を付けた竹刀稽古^{しなひ}というものではなく、ユスと呼ばれる南九州特有の雑木(算盤の玉を作る木)を刀の長さに切った丸棒で、地中に埋め込んだ椎や栗の木を相手に打ち込みを行う立木打^{たてぎうち}と、様々な相手の武器や動きを想定し無我無心に敵を破る型稽古とからなっており、現代スポーツの剣道のような試合稽古というものはありません。この点が他流の稽古と甚だ趣を異にしております。

普段の稽古では、服装はいつも着のみ着のままを慣いとし特別の支度はせず、裸足になってすぐ始めます。

■立木打^{たてぎうち}



示現流演武「立木打」

立木打^{たてぎうち}は、示現流の一番の基本稽古で、切り口およそ3寸から5寸(直径約10~15cm程度)の椎や栗の木のような堅牢な木を3尺ばかり(約90cm程度)地中に埋めた立木を相手に、ユスの棒で5~6間(約10m程度)の距離から走りかかって進退を繰り返しながら左右に

打ち込むもので、いたって簡単な稽古方法です。

左右といっても横からでなく斜め約 30 度の角度からまっすぐに切り下ろすのです。日々数百回から数千回の稽古をひたすら重ねていくことで手の締りなど太刀の使い方、腰の据わり、進退や駆引きの呼吸等を会得するのです。これが示現流の根本で、この簡単な動作の練磨によって実際に真剣を持った時の太刀の使い方、心身の鍛錬を行うも

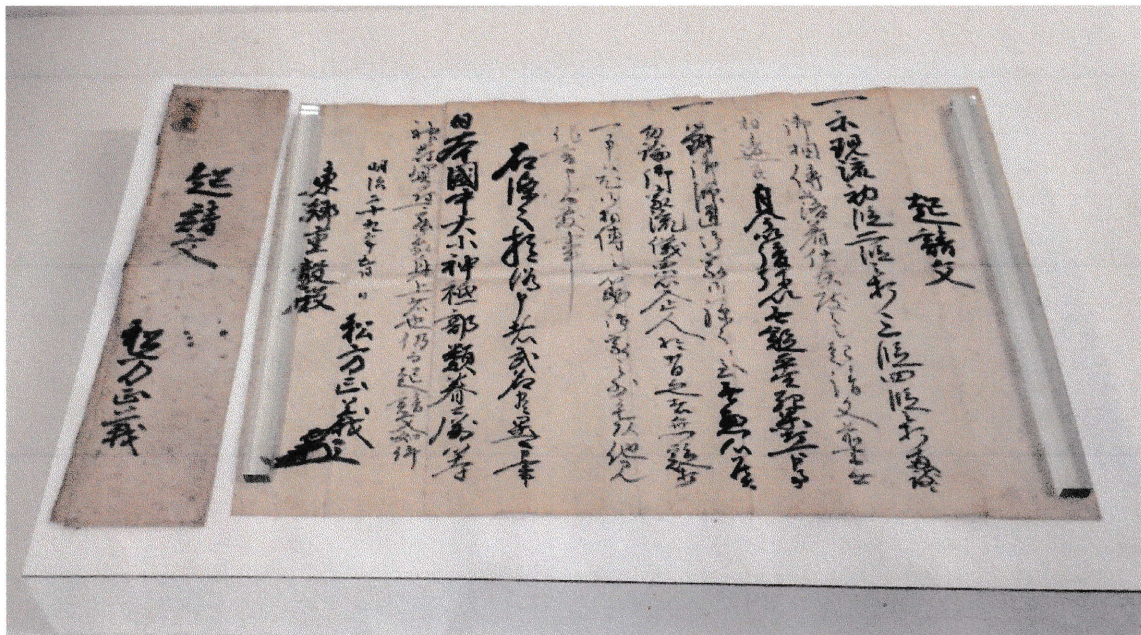
ので、古人は“朝^{あした}に三千、夕^{ゆうべ}に八千”回、立木^{たてぎ}を打てと教え、人に隠れて稽古に励んだものです。



示現流兵法所道場 *立木打で削られた立木

示現流兵法所の道場の四隅には 4 本の立木^{たてぎ}が埋め込んであり、約半年で大きくえぐれて取り替えていきます。立木打に熟達すれば、いかなる大敵も恐るるに足りない、腰が定^きまれば腹が極^きまり度胸が自ら据わ

って、強敵に逢っても敗^{やぶれ}を取らぬのが示現流の立木打^{たてきうち}の重大なる所以なのです。



松方正義公起請文

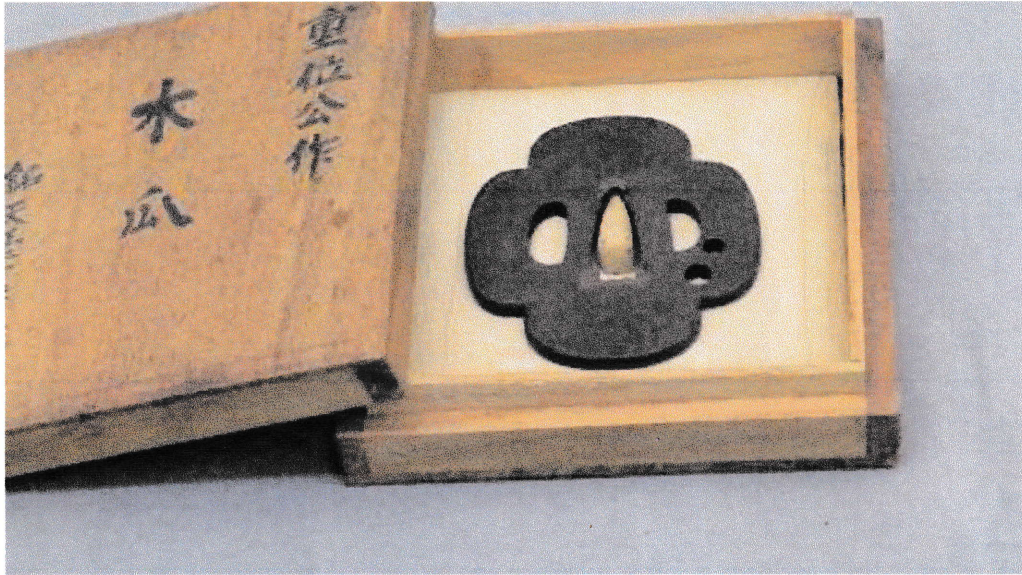
示現流の精神としては、敵に対し、死を極めて打つことを疑わない、その精神に落着いたことを誓う誓詞^{せいし}があります。示現流においては、肉を切らせて骨を切るということは考えないのです。わが打撃を少なくして、敵を倒すと考えるのは、そこにまだ何程かの未練があるのです。一挙に死を極めるというのが示現流の誓いなのです。

遅れをとるということは当流^{きんもつ}の禁物であって、打は常に機先を制するにあり、得物がなければ、下駄を掴んででも、素手ででも勇猛果敢に打ち込んでいくのが平常の精神なのです。

当流^{ならい}の慣^{ならい}として、無益な殺生をきつく戒め、刀には針金をもって鞘^{さや}止めをなし、抜くべからざることを本旨^{ほんし}としました。

しかしながら、いったん鞘^{さや}止めを外したならば相手を倒すまでは決

して鞘に納めない。一刀のもとに敵を切り伏せ、自らも倒るるを厭わず、死を極めて踏込むのが当流の精神で、“死を極めたる一刀は必ず勝つ”、“一^{いち}の太^{たち}刀を疑わぬ”というのがその特色です。



鞘止めの穴を穿った重位公作の鰐

■型

初^{しよど}度^ど：燕^{えん}飛^び、小^こ太^だ刀^ち、再^せ起^き、三^{みつ}太^た刀^ち

両^{りやうど}度^ど：持^{もち}掛^{がかり}、早^{はや}捨^{しゃ}、長^{なが}木^{ぼく}刀^{とう}、振^{ふり}掛^{がかり}

立木打を基礎として修練したのち、対する敵の業を型稽古によって学び相手の動きにいち早く対応する太刀さばきを修得していきます。

型には、燕^{えん}飛^び、小^こ太^だ刀^ち、再^せ起^き、三^{みつ}太^た刀^ち、持^{もち}掛^{がかり}、早^{はや}捨^{しゃ}、長^{なが}木^{ぼく}刀^{とう}、振^{ふり}掛^{がかり}の

8種があり、ほかに槍^{やり}留^{どめ}の型があります。

このうち、燕^{えん}飛^びは最初に教わる型で終生これを繰り返し鍛錬していき

ます。燕^{えん}飛^びは流祖東郷^{ちゆうい}重^{ちゆう}位^いが考案した示現流の奥義^{おうぎ}十二の刀法を盛り

込んだ型稽古法です。示現流における型稽古は、いわゆる型でなく悉く実践実地の練習です。その中に受ける形のあるところも、防ぐ心ではなく、打ちをよくする稽古のためであって、我が身を忘れ、無我無心に敵を破る練習をするのが本旨です。

型稽古はいずれも悉く実践実地のための練習でありダシと呼ばれる^{うちたち}打太刀の攻撃に対し、わが身を忘れ無我無心に敵を破る練習をするのです。故に稽古に当たっては相手の動きを防ぐということは考えず、猛然として立ち、一挙に敵を撃破することが必要です。敵を破る以外に我が身を^{こうぼういちによ}防ぐ方法はないのです。すなわち攻防一如なのです。

普段の稽古では着のみ着のままで行い、挨拶は道場への出入り及び武器を手にする時のみとし、いったん棒を取ったならば互いに礼を交わさすことはありません、これは得物を取って立てば敵に対する心境なのです。

^{しょど}初度、^{りょうど}両度の修練を積み重ねれば、業績に応じ^{だん}初段から四段に至る段の^{くらい}位となります。

示現流の^{わざ}業と心について

示現流の流祖東郷^{ちゅうい}重位は、多くの^{しんぼう}心法、^{ぎほう}技法の^{でんしょ}伝書を残しています。

^{ちゅうい}重位は、^{えいろく}永禄4年(1561)生まれで、^{かんえい}寛永20年(1643)82歳で死亡しました。初め^{やじゅうろう}弥十郎と号していましたが、^{とうべえ}藤兵衛、^{ながとのかみ}長門守、^{いずみのかみ}和泉守、^{えちぜんのかみ}越前守、^{ひぜんのかみ}肥前守、^{ちゅうい}隠居の後に自ら^{ちゅうい}重位と号しました。

師の^{ぜんきち}善吉和尚が^{ちゅうい}重位に与えた伝書は三巻でその後『^{しんぴしんていしやう}深秘心底抄』が授与されましたが、これは文字が少なく^{いじ}意地(理)が玄妙であり、一般的には理解しにくいものです。そこで重位は将来、心と業が誤解される

のを恐れて十三巻の伝書を残したのです。代表的な伝書をあげますと、

『聞書』^{ききがき} 慶長9年(1604)作

『示現流兵法切紙』^{きりがみ} 元和7年(1621)作

『示現流秘伝書』 元和7年(1621)作

『燕飛之次第』^{えんぴのしだい} 寛永元年(1624)作

『兵術察見』^{へいじゅつさっけん} 寛永16年(1639)作

『示現流兵法書』^{じげんりゅうひょうほうしよ} 上・中・下巻』 元和年間(1615～1623)作

その他『阿字観』^{あじかん}『阿字察見』^{あじさっけん} など三百点が現存しています。これらはすべて鹿児島県の有形文化財(*鹿児島県指定有形文化財東郷家古文書)に指定されており、いずれの文書も示現流の奥義を説いています。これらの伝書を体系化したのが『兵法書』^{ひょうほうしよ}です。

重位^{ちゆうい}は、示現流の業^{わざ}と心のありようを、神道・仏教・儒教、特に仏教・儒教の比喻から要句を引用し、また自身が修業した結果の意地^{いじ}と味^{あじ}から説いています。和歌をたしなみ歌人でもあった重位は、これら神・仏・儒の語句の中から引用して示現流の極意^{ごくい}を「いろは歌」に織り込んだりしています。そして、これらの相伝書を後年、解説したのが久保紀之英^{くぼきのゆきひで}著の『示現流聞書喫緊録』^{じげんりゅうききがききんろく}です。

示現流の相伝書に紹介されている教法の概略は次の心・技法の五項目からなります。

第一は「汀江放船」^{ていこうほうせん}に代表される無念無想^{むねんむそう}の境地を悟り、心に一物^{いっもの}もない自分を作り上げることの大切さを説いています。

第二は、刀の柄^{つか}の握りが、いかに重要であることを示すために、仏教の

(入来花水木会示現流講演会参考資料)

六道・地獄、餓鬼、畜生、修羅、人界、天人界の語を譬として説いています。

第三は、相手を打つ時の間合い、歩数、呼吸、脈などを示し、安定したスピードで如何にして、相手を打つべきかを説いています。これを「寄足の法則」といいます。

第四は、段位と称号を示し、修行の順序と打の方法を説いています。示現流では、段位を初度、両度、初段、二段、三段、四段とし、称号は、初度、両度を学士、初段・二段を賢、三段・四段を聖としています。そして各段に各々、技を配置しているのです。

第五は、相手と対戦するときの目付けについて、見、観、蛙、中道の語句を譬として、対戦するときの目付けのありかたを説いています。

無念無想 心に一点の工もなく、天地の神と一体となる境地に至れば何者が自分に向かうことができようかと説いています。

修業することが自らを完成する道であることを自覚して怠らず努力を重ねる者は、その資質を完成することができると説き、努力に対する効果を求めることに汲々とする者には向上の道は閉ざされると戒めています。

示現流というと、ややもすれば一撃必殺の戦技のみが強調されがちですが、江戸時代きっての名僧南浦文之和尚がこれからの侍の時代にふさわしい薩摩藩士を育成しようと熱い思いで命名したように示現の二字の意味する、師の啓示を受け自ら励み修行を重ねることによって神力に通じるといふ高い精神性が込められた、戦技を超越した薩摩藩独自の剣術兵法であることを是非多くの人に知っていただきたいと思います。

(示現流兵法所史料館 館長 有村博康)